

熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター平成 30 年度シンポジウム

## 復興のデザイン ～この町で暮らし続けるために～

平成 30 年 7 月 10 日(火) 18:00～20:45

益城町交流情報センター「ミナテラス」視聴覚室

### ○基調講演「復興とデザイン」 内藤 廣氏(建築家/東京大学名誉教授) ※要約

#### 《災害時におけるデザインの必要性》

- ・災害時には「土木」が全面的に出る。東日本大震災ではそれが顕著であった。「建築」は人の暮らしに近い分野だが、災害時はあまり生かされない現状がある。
- ・三陸地方では「防潮堤」「高台集団移転」「区画整理」がセットだった。しかし膨大な事業費をかけた割に、人が減っていくという現象が起きている。
- ・“人の暮らしを組み立てる”こともひとつのデザインである。
- ・グッドデザイン賞の審査委員長をしていたため、「デザインとはなにか」と話す機会が多くあった。デザイン＝「近未来の手ざわり」と考えている。少し先、少し未来の手ざわりはどうなるのか、ということを考える必要がある。益城町の「近未来の手ざわり」はどのようなものか問いかけたい。
- ・復興は過去からのリベンジであり、デザインは近未来の手ざわりとすると、復興とデザインは過去から未来へつながるものと言える。

#### 《災害は見えないところから》

- ・阪神淡路大震災では都市の被災、新潟では中山間地域の被災、かと思えば三陸地方で津波が起き、熊本地震では震度 7 が 2 度襲った。災害は毎回形を変え、私たちの意識が集中していないことが起きる。
- ・東京ではケミカルハザードやバイオハザード、それから東京オリンピックに向けてサイバーテロが懸念される。
- ・建築家の佐藤武夫氏が「日本は豊かな自然があるが、それは災害との隣りあわせでもある」という話をしているが、その通りである。
- ・迅速図を見ると、昔の集落は山裾に住んでいたことがわかる。昔の人は自然に立ち向かうのではなく、上手に避けながら住んでいた。

#### 《文化とコミュニティとは》

- ・文化・コミュニティとは「基礎体力・復元力」であると考えている。岩手県野田村の復興に携わっていたが、村長が住民からの信頼を得ており、村のまとまりがあったため、東北で復興が一番早かった。
- ・戦災復興を手掛けた石川栄耀(いしかわひであき)は都市において、人が喋り、楽しむ場所として夜の街、盛り場が必要であるという思想から、夜の都市計画を考えた。一見、余剰と考えられやすいが、そうではない。また、法外都市計画についても謳っている。トップダウンの法定都市計画ではなく、地域コミュニティを重視した計画である。
- ・石川栄耀は「都市の味」という言葉を使っていた。「益城の味」とはどんなものだろうか。

## ○パネルディスカッション

### 《木山地区まちづくり協議会 増田会長》 男性・60代

- ・震災後、自分を助けてくれたのは仕事だった。地震が起きていなかったら早期定年を考えていたが、建築業のため、地震後に自分のやるべきことができたため、65歳まで続ける予定である。
- ・当初は自分たちの地区（宮園地区）だけで区画整理のあり方を考えていたが、他地区も含んだ木山地域全体で考えるべきだと気づき連合会をつくって現在会長をしている。

### 《上陣・下陣・北向地区まちづくり協議会 西会長》 女性・30代

- ・各地区の区長から推薦され、無理矢理のような形で会長になった。
- ・初めはなにもわからず、懇談会などもすべてコンサルタント任せだった。2年目も残留となったが、コンサルタントからの支援が受けられない状態になり、自分から他地区に赴いたり、益城ラボに行ったりして勉強を始めた。
- ・245世帯あるので、関心のない人もまだまだ多い。消防団や地域の組織へまちづくり協議会について説明して回っている。
- ・1つの協議会に3地区あり、それぞれに特色がある。1つにまとめるのが難しい。
- ・最近「薩摩の芋づる、肥後の引き倒し」という言葉を知った。年配の人を見ていてどうして足の引っ張り合いをするのだらうと思っていた。しかし、活動が盛んな櫛島地区を見て、いつの間にかライバル視していた自分があり、自分も「肥後の引き倒し」をしていたことに気づいた。そうではなく、一緒になって頑張ろうと考えを改めるようになった。
- ・協議会でウォークラリーを開催した際、初めて「津森地層」という地層を知った。地元住民なのに何も知らなかった。その時から地層について興味を持ち、調べ始めるようになった。

### 《熊本県立大学 柴田教授》

- ・自治会とまちづくり協議会は何が違うのかというのがよく議論になる。まちづくり協議会は参加者に限りがない。自治会に加入していない人、仮設住宅に入った人、他地区に移り住んだけれど地域と関わりを持ちたいという人、みんなが入ることができる。

### 《内藤氏とのディスカッション》

- Q.都市計画道路を通すにあたり、商店との関係や歩道の取り方などを考えている。まだ惣領の交差点について検討が必要だが、道路のあり方についてどのように考えているか。（円山先生）
- A.とりあえずつくっておけば、後からどうにかなる。ある研究者は渋滞を起こした方がお店に人が立ち寄ると考えた。あまりまじめに考えない方がいい結果を生むこともある。

- Q.益城は商店が少なくなってしまった。昔は中心街に商店街が連なっていた。賑わいとなる町になるにはどのようにするとよいだろうか。アドバイスが欲しい。（増田会長）

- A.随分工事が進んでしまったが、川を活かすと良い。川を活かしたまちづくりをしている地域はやわらかくなり、人が集まる。是非一度静岡県三島市源兵衛川を訪れてほしい。

三島市源兵衛川⇒<http://kouenguide.com/2015/12/15/源兵衛川親水公園/>

Q.災害への対応力を磨くにはどのようにしたらよいか。(西会長)

A.東京大学目黒先生が発災図(目黒巻)を考案している。発災後の自分の行動を書き出すことで備えることができる。

目黒巻⇒[http://risk-mg.iis.u-tokyo.ac.jp/meguromaki/\\_src/1350/meguro\\_maki.pdf](http://risk-mg.iis.u-tokyo.ac.jp/meguromaki/_src/1350/meguro_maki.pdf)

Q.災害時はスピードが問われる反面、景観についての配慮が置き去りになってしまうと感じる。内藤氏もそのような体験はあるか。(柴田先生)

A.農村部において、最低でも外壁に白色やクリーム色を用いることは避けるべきである。彩度を落とした色を採用すれば随分よくなる。何年たっても、緑を植えても、なじまない。景観条例等で規制するのも手である。外壁の色を変えるだけであればお金はかからない。

### 《大学に求めるもの》

- ・「地域の味をどう作っていくのか」が一番のキーワードだと思う。
- ・3.11の際、復興デザイン研究体を立ち上げた。都市計画や土木、建築の分野が入っているが、医療や法律、経済などの分野も必要だと思う。
- ・これから南海トラフなどが迫っている中で、新しい復興のあり方を自分たちで作っていく必要がある。大学には様々な分野が集った「地域学部」を是非作ってもらい、何かあった時にそのノウハウを活かせる機能をもってもらいたい。

復興デザイン研究体⇒<http://bin.t.u-tokyo.ac.jp/dss/index.html>

以上